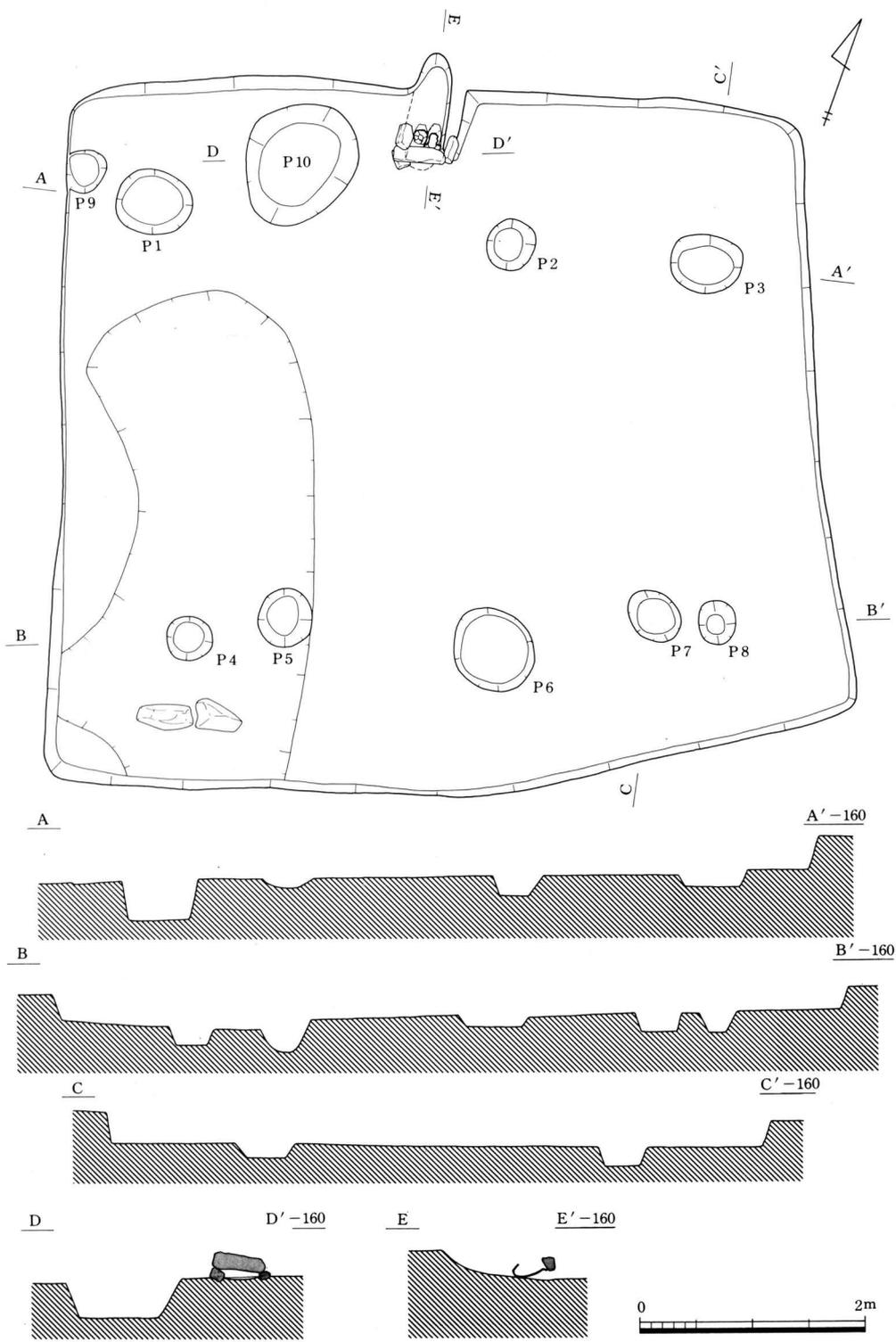


Ⅲ-79 25号住居址出土土器実測図・拓影

26号住居址

遺構 (Ⅲ-80~82)

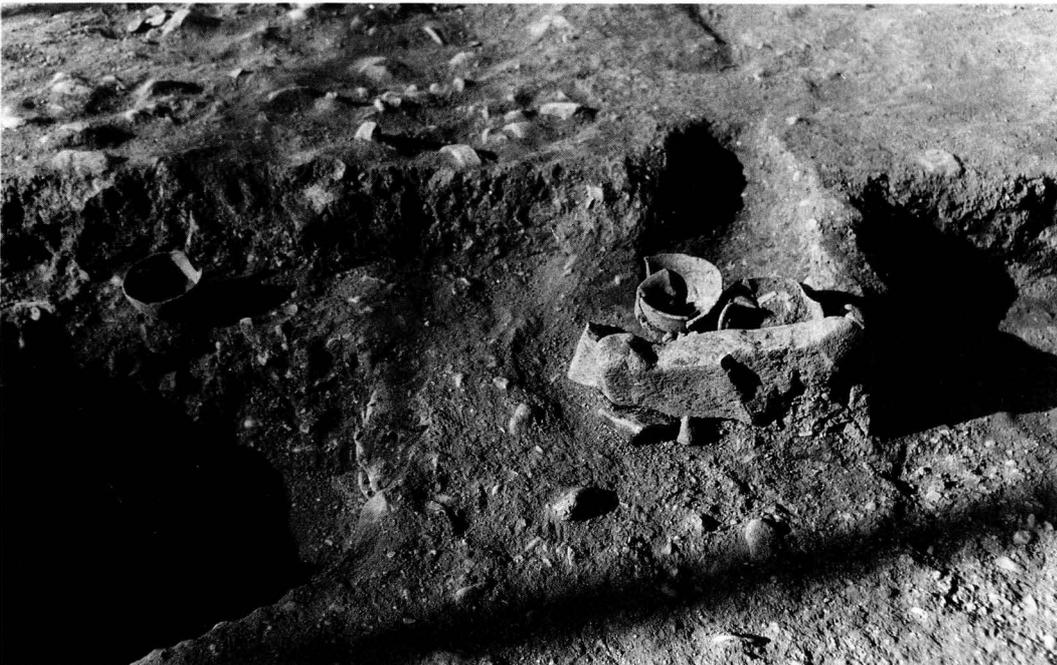
第10号住居址の下方から検出された住居址で12号・23号住居址を切って構築されている。6.30×6.75mのやや不整な隅丸方形プランを呈し、主軸はN-21°-Wにとる。検出面からの掘り込みは比較的深く壁高は北壁23cm・南壁28cm・東壁20~30cm・西壁23cmほどを測る。柱穴はP1~P9までが確認されており、深さはP1 37cm・P2 17cm・P3 16cm・P4 14cm・P5 29cm・P6 8cm・P7 17cm・P8 18cm・P9 14cmである。主柱穴にはP1・P3・P4・P7の4本方形配列もしく



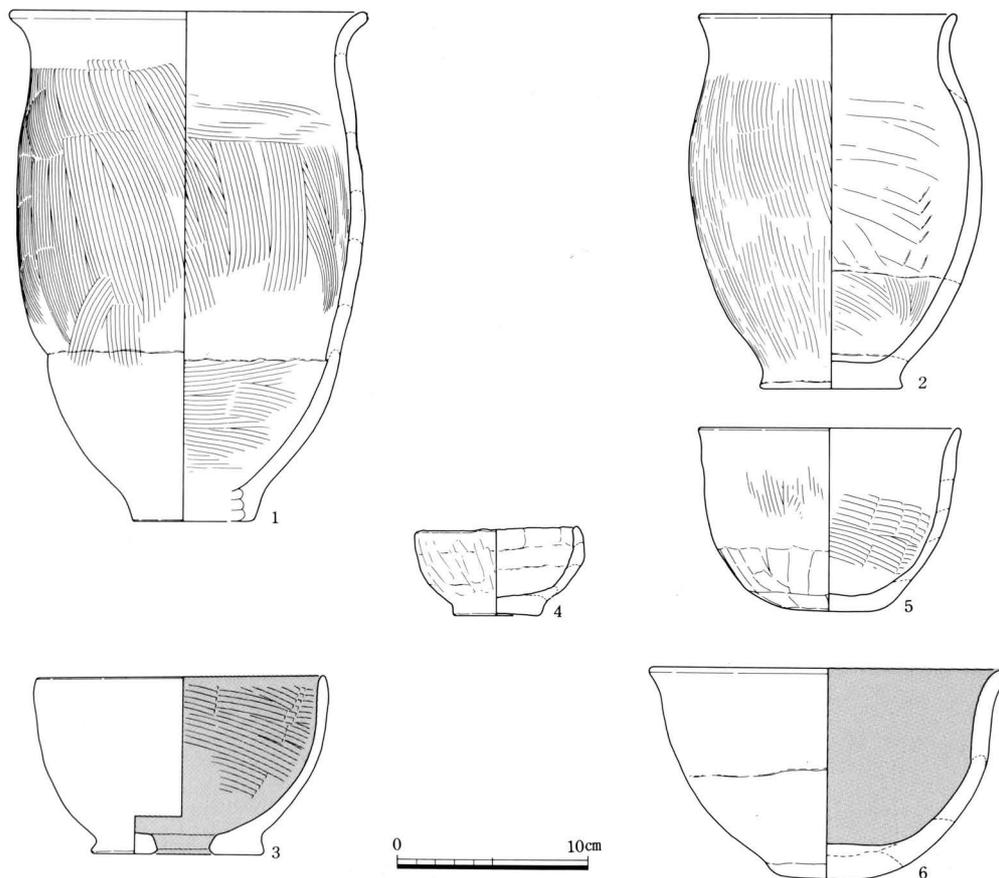
III-80 26号住居址实测图



Ⅲ-81 26号・12号・22号・23号住居址



Ⅲ-82 28号住居址カマド



Ⅲ-83 26号住居址出土土器実測図

はP1・P2・P3・P4・P6・P7の6本方形配列が考えられようか。カマドは北壁ほぼ中央部に位置している。右袖部はほぼ検出し得たが、左袖部は明確になし得なかった。粘土製の両袖カマドと考えられる。カマド内部より甕2個体が検出されている。P10は深さ34cmを測り貯蔵穴かと思われる。住居址南東側にて、かなりの範囲において不明瞭ながらも浅い落ち込みが認められているが、性格は不明である。あるいはさらに他遺構との切り合いがあるかもしれない。

遺物（Ⅲ-83）

甕（1・2）（1）は口縁部と底部を一部欠損する。口径18.6cm・胴部最大径18.5cm・底径6.4cm器高27.1cmで口径と胴部最大径とはほぼ等しい。胴部下半の接合が不整なためややいびつな器形を呈する。胴部は中位でやや張り、口縁部は短く軽く外反し端部は丸く終る。また底部はやや突出する。外面の整形は 部から胴部下半の接合部までは軽いヘラケズリ後ナデ整形され、上半の接合後、接合部から上に縦方向のハケ整形を行っている。口縁部は内外面とも強く横ナデされる。内面は胴下半に接合痕を顕著に残す。底部から接合部までは接合前に横から斜方向のハケ整形を行い、胴中位は接合後縦方向のハケ、さらに頸部下に横ハケ整形を施し、その後接合部付近を横

へラケズリしている。(2)は口縁部と胴上半を1/2ほど欠損するが胴下半ならびに底部は完存する。口径13.4cm・胴部最大径15.4cm・底径7.4cm・器高19.8cmで胴中位に最大径を有する。口縁部は頸部より短く軽く外反して終り、底部はやや突出する。胴部外面の整形は全体に縦方向のハケ整形がなされ、中位以下でその後雑なナデ整形がなされる。口縁部は内外面とも強く横ナデされる。胴部内面は横方向のハケ整形後、胴中位付近より上を全体に軽いへラケズリによって整形している。底部には木葉痕をとどめる。

甔(3) 口縁部を若干欠損するがほぼ完形品で口径15.2cm・底径9.6cm・器高9.5cmである。底部に口径3.0cmほどの焼成前穿孔が一孔有する。外面は横方向のへラケズリ後全体に比較的ていねいなナデ整形がなされる。内面は横から斜方向のハケ整形がなされ黒色処理される。底部はナデ整形されるが木葉痕をとどめている。

壙(5・6) (5)は完形品で口径13.8cm・底径5.1cm・器高9.7cmである。体部はやや直線的に立ち上がり口縁部にて若干外反する。体部外面はハケ整形後下半を縦方向のへラケズリで整形し口縁部は内外面とも強く横ナデする。底部はへラケズリで仕上げられやや不安定な平底をなす。また体部内面は横方向のハケ整形で仕上げられている。(6)も口縁部と体部の一部を欠損するのみで、口径18.8cm・底径5.1cm・器高11.2cmである。体部外面はへラケズリ後軽いへラミガキによって仕上げられるが、接合時の痕跡を一部にとどめる。内面は全体に軽いへラミガキによって仕上げられ、黒色処理される。

坏(4) 小型・粗製の坏で完形品である。口径8.4cm・底径4.4cm・器高4.5cmである。内外面とも輪積痕をとどめ、雑なナデ整形後部分的にへラケズリを行っている。

(1)(2)(5)(6)はカマド内より、(3)はカマド西方の床面上より出土している。

以上出土土器の様相よりすれば本住居址は古墳時代後期の所産と考えられよう。

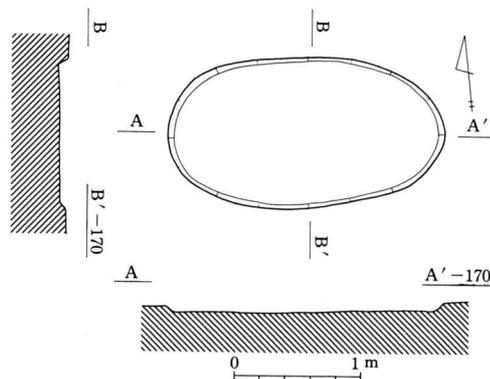
1号土壙

遺構(Ⅲ-84・85)

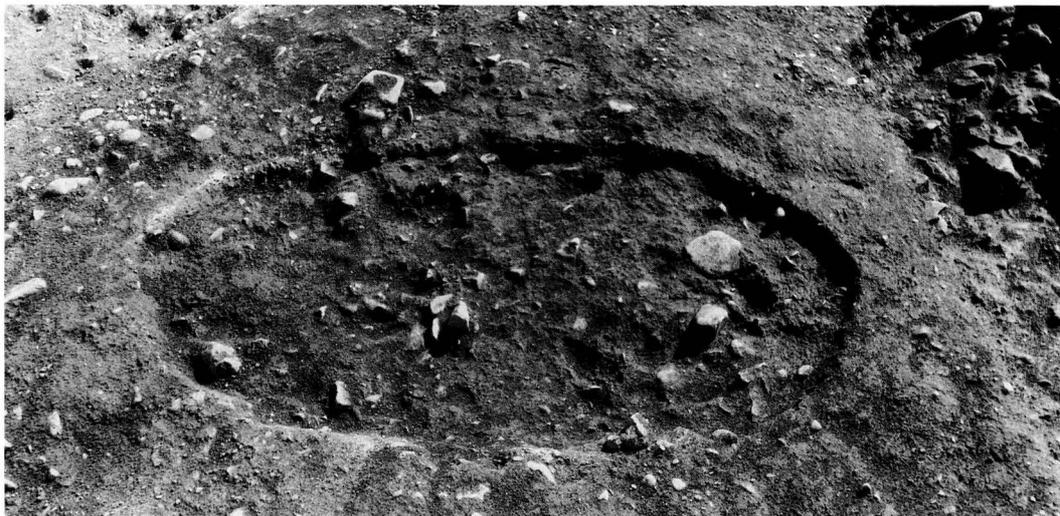
4.20×1.20mの長楕円形を呈し、主軸はほぼ東西方向にとる。検出面からの掘り込みは浅く全体に10cm前後である。

遺物

出土遺物はいずれも小破片ばかりで図示し得るものはないが、平安時代のものと考えられる。



Ⅲ-84 1号土壙実測図



Ⅲ-85 1号土壙

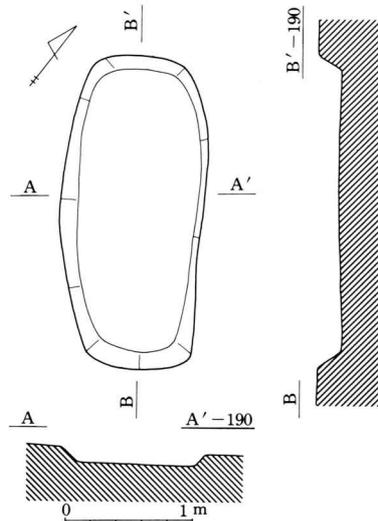
2号土壙

遺構 (Ⅲ-86~88)

調査区中央西側にて検出されたもので、検出時には不明瞭ながら周辺に黒色土の落ち込みが認められたため住居址と判断して調査を進めたが、調査の進行にともない土壙であることが確認された。2.50×1.15mの隅丸長方形プランを呈し、主軸はN-38°-Wである。また検出面からの掘り込みは10~20cmほどである。土壙南端付近にはほぼ完形の甕形土器が壙底面より若干浮いた状態で出土している。壙底面は掘り込まれるままの状態であり、特別の施設はなんら認められなかった。

遺物 (Ⅲ-89・90)

甕 (1~3) 1は口縁部の一部を欠損するがほぼ完形である。口径21.3cm・頸部径16.7cm・胴部最大径21.1cm・底径6.0cm・器高25.9cmである。口縁部は緩やかに外反し、端部は面とり後横ナデされる。胴部は球胴化の傾向がうかがえるが最大径は口縁部にもつ。外面胴下半は下から上へのヘラ削り後、縦方向のヘラミガキがなされ、胴中位付近には細い斜方向のハケ整形痕を顕著に残す。また底面はヘラケズリ後雑に磨かれる。内面は全体にハケ整形後軽い横ヘラミガキがなされる。文様は頸部に三連止めの簾状文を施文した後、口縁部は口縁端に一带波状文を施文しその後基本的には下から上へ、胴部は上から下へ波状文を施文している。楯原体は9本/2.2cmである。



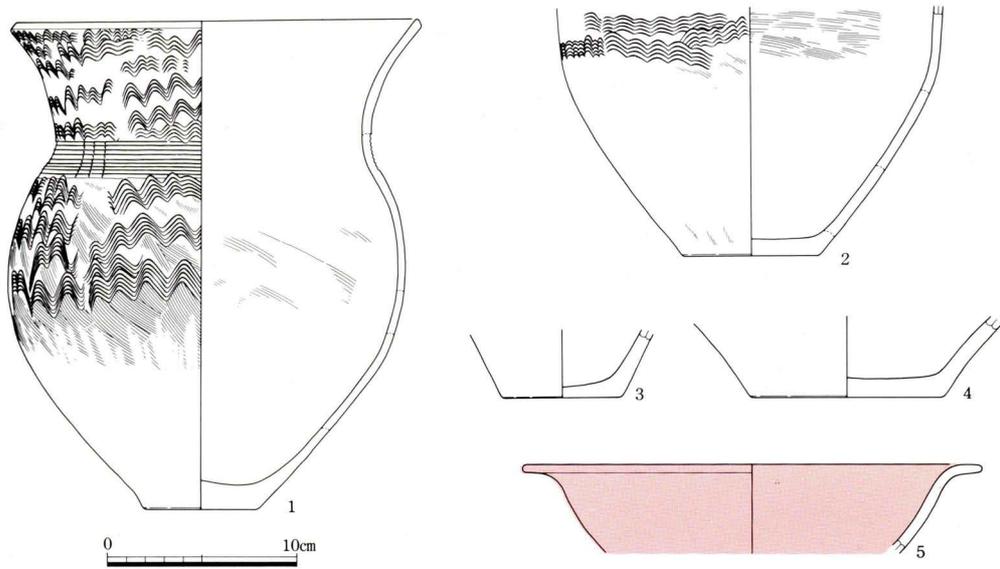
Ⅲ-86 2号土壙実測図



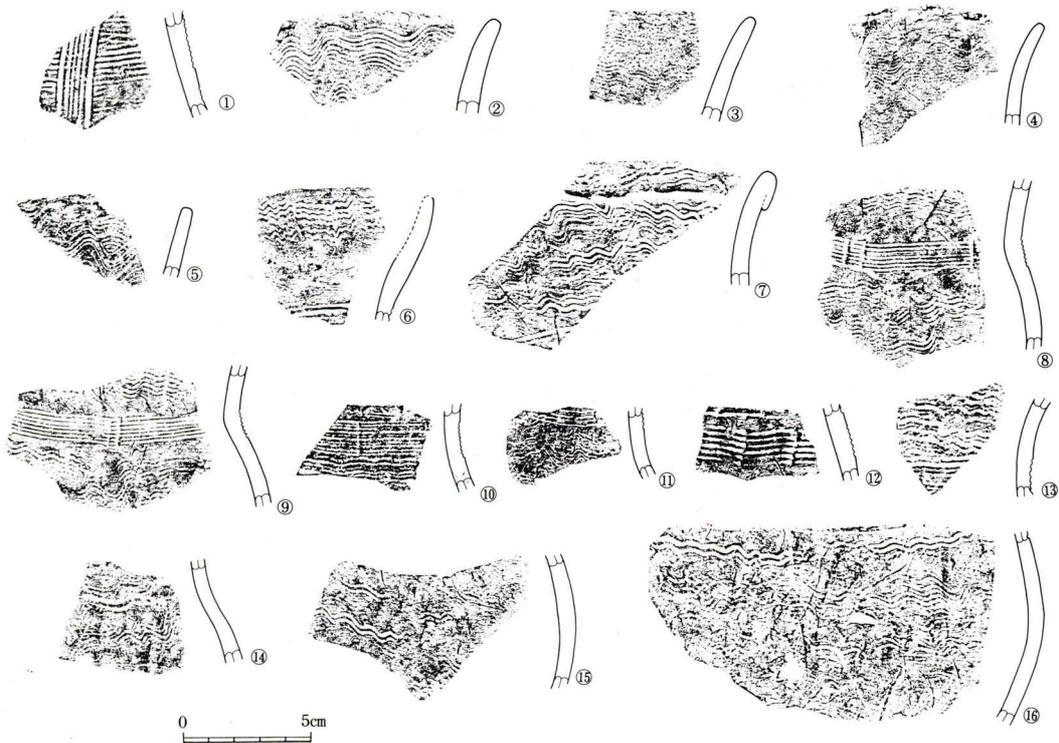
Ⅲ-87 2号土坑



Ⅲ-88 2号土坑土器出土状态



III-89 2号土壙出土土器实测图



III-90 2号土壙出土土器拓影

また、本資料は煮沸の痕跡を顕著にとどめており、内面胴下半には煮沸物のこげつきが、外面胴中位以上の内面のこげつきと相対する部分には、ススの付着が認められる。2は胴中位以上を欠損し底径7.2cm・胴部最大径20.2cmである。外面は文様施文後縦方向のヘラミガキがなされ、底面もていねいにヘラミガキされる。内面はハケ整形後横ヘラミガキされるが中位付近には顕著にハケメを残し、底面はていねいにナデ整形される。文様は確認できる範囲では上から下へ波状文を施文しており櫛原体は7本/1.5cmである。3は底部破片で底面はヘラケズリ後軽く磨かれ、胴部は内外面ともヘラミガキされる。

壺(4) 底部破片で底径10.0cmである。底面は全体に軽いヘラミガキがなされるが、木葉痕をとどめている。

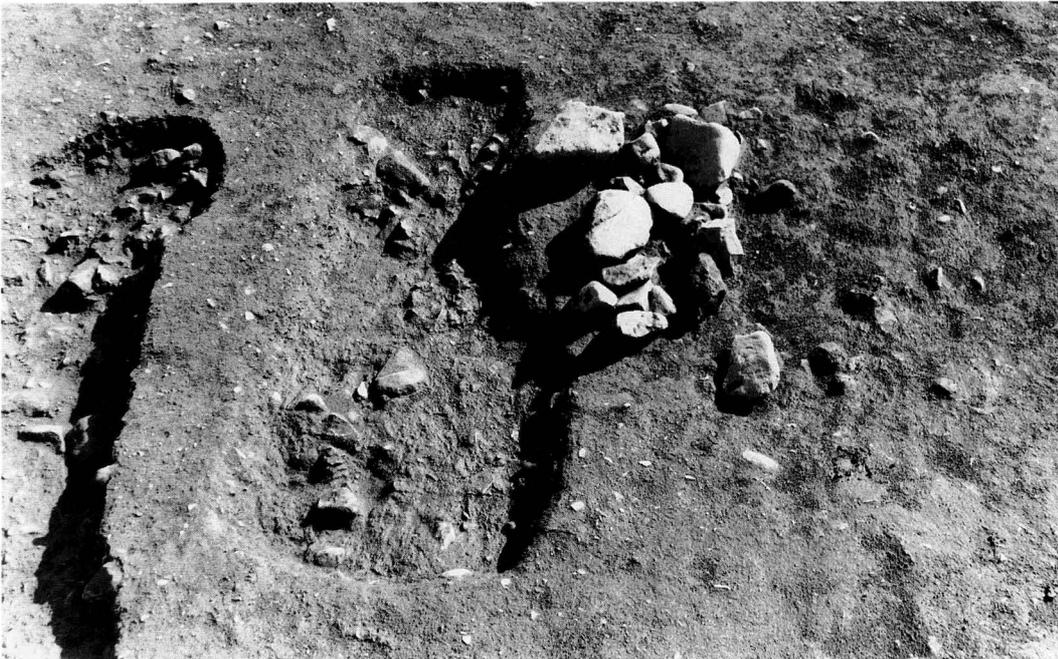
高坏(5) 坏部破片で1/4ほど残存する。口径24.2cm・口縁部は端部にて短く水平に近く外反する形態をとる。内外面ともヘラミガキされ赤彩される。

以上出土土器の様相よりすれば2号土壇は弥生時代後期箱清水式期の所産ととらえられる。

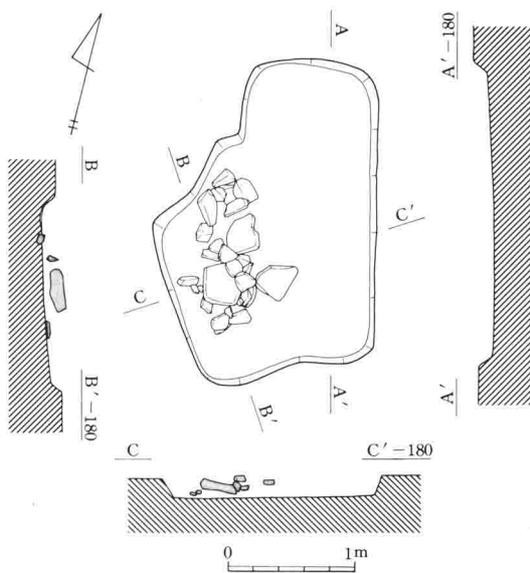
3号土壇・集石遺構

遺構(Ⅲ-91・92・94・101)

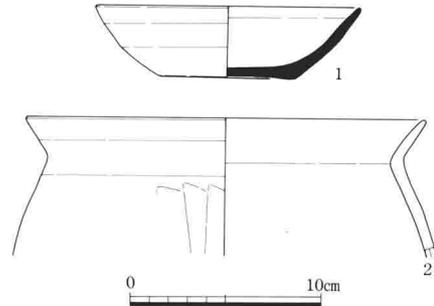
二つの遺構が切り合った形で検出されたものだが、切り合いの前後関係等調査にて確認し得なかったため一括して記しておく。3号土壇は2.45×1.10mほどの隅丸長方形を呈し、主軸はN-13°-Wである。検出面からの掘り込みは北壁12cm・南壁12cm・東壁16cmほどである。集石遺構



Ⅲ-91 3号土壇・集石遺構



Ⅲ-92 3号土壇・集石遺構実測図



Ⅲ-93 3号土壇・集石遺構出土土器実測図

は、長軸1.60mほどの隅丸長方形の掘り込み中に30cm大の石を中心とした配石がなされるものであるが、配石は雑で規則性は認められない。検出面からの掘り込みは北壁12cm・南壁8cm・西壁16cmほどで、掘り込みの主軸はN-30°-Wである。配石下には

掘り込み等の施設は認められなかったが、須恵器坏の完形品が一点出土している。

遺物（Ⅲ-93）

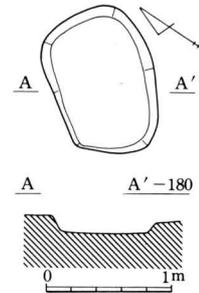
(1)は集石遺構の配石下より出土した須恵器坏で完形品である。口径14.0cm・底径7.0cm・器高



Ⅲ-94 集石遺構・掘り上がり状態

3.8cm。底部には回転糸切り痕をそのまま残す。また内外面に火だすきの痕跡を顕著に残している。(2)は3号土壇より出土した甕の口縁部破片で口径20.0cmである。口縁部は頸部から短くくの字状に外反し、端部はやや尖り気味に終る。口縁部と胴部内面は強い横ナデによって整形されるが胴部外面は縦方向のヘラケズリで仕上げられる

出土土器の様相よりすればともに平安時代の所産と考えられる。



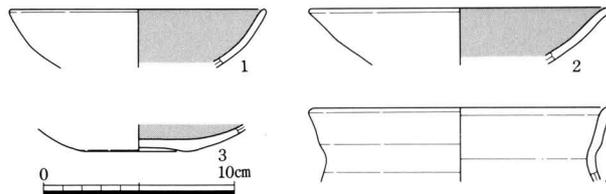
III-95
4号土壇実測図

4号土壇

遺構 (III-95・97)

25号住居址を掘り込んでいる。

1.20×0.82mほどの楕円形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く14cmほどである。



III-96 4号土壇出土土器実測図

遺物 (III-96)

坏 (1~3) (1)(2)はともに口縁部破片で口径はそれぞれ13.4cm、15.8cmである。ともに内外面は比較的ていねいにヘラミガキされ、黒色処理される。(3)は底部付近の破片で内面は黒色処理され、底部には回転糸切り痕をそのまま残す。



III-97 4号土壇

甕(4) 口縁部破片で口径は15.8cmである。口縁部は中位にて屈曲しつつも緩やかに外反し、端部にて肥厚する形態を呈する。内外面ともに強い横ナデがなされる。

1号溝址

遺構 (Ⅲ-98・101)

東西方向・南北方向ともにそれぞれ約3mほどの緩やかにくの字状に屈曲する形態の溝址である。溝幅は平均0.80mほどである。深さは南側では10cmほどであるが北側にゆくにつれて深くなり、平均25cm前後である。溝底は全体に平坦で、

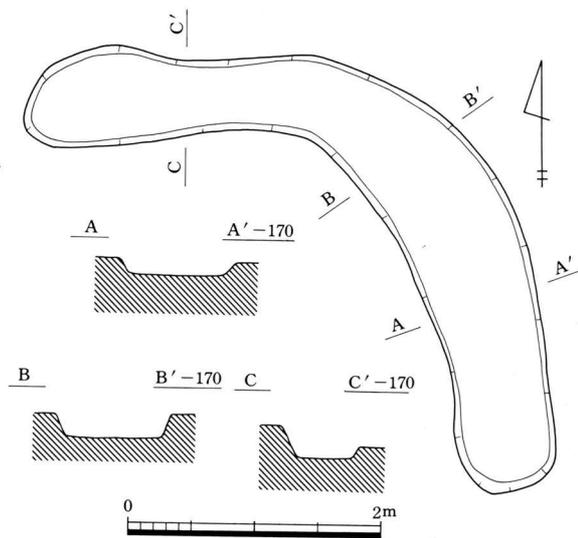
溝の断面は逆台形状を呈する。遺物はいずれも覆土中より出土しており特別な遺物集中箇所等は存在しなかった。

遺物 (Ⅲ-101)

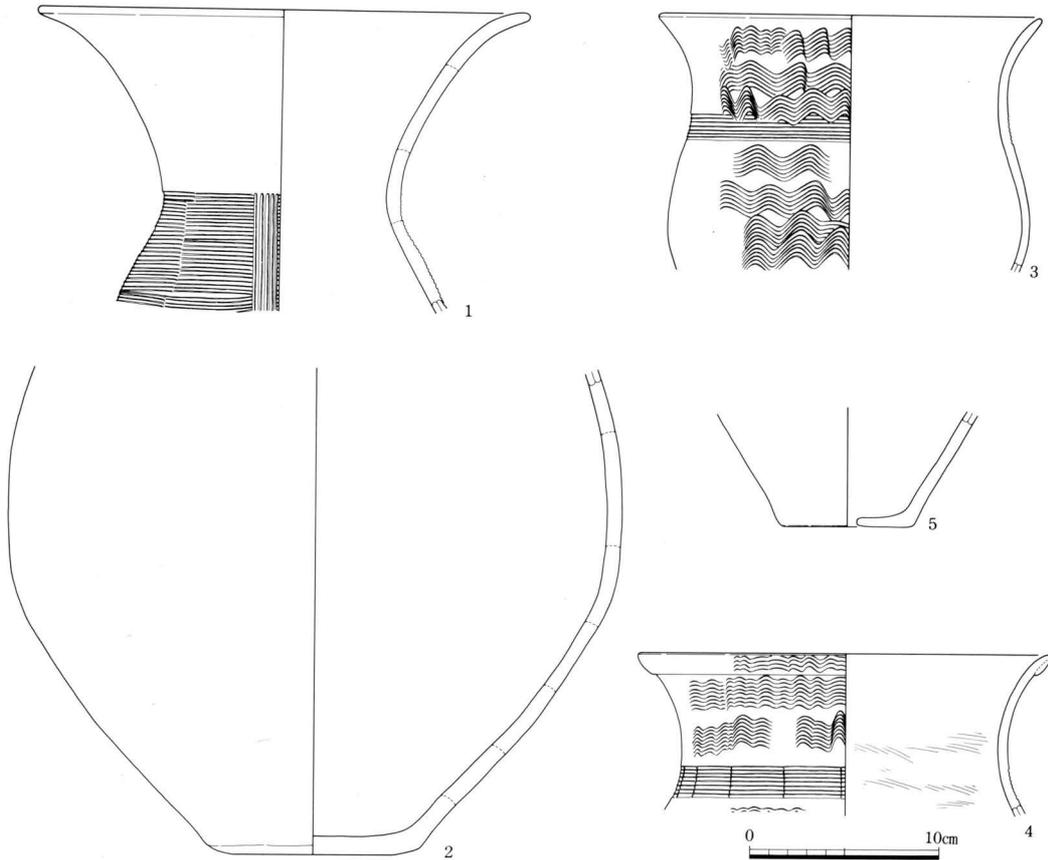
壺 (1・2) (1)は頸部以下を欠損し、口縁部～頸部も1/4ほどが残存するにすぎない。口径23.6cm。口縁部は頸部から朝顔状に大きく外反し端部は丸く終る。口縁部外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキによって整形されるが内外面ともに赤彩はされない。頸部には櫛描T字文を施文する。(2)は胴上半を欠損する。底径11.0cm。胴部はやや強く張り胴下半で鋭くくびれることなく底部へ収約する形を呈する。内外面とも器面の摩耗が著しく詳細は不明であるが、外面は全体にヘラミガキ整形され内面はハケ整形後ナデ整形される。

甕 (3・4) (3)は胴中位以上の1/4ほどの破片で復原口径20.4cm・頸部径17.0cm・胴部最大径19.2cmと口縁部に最大径をもつ。口縁部は頸部から緩やかに外反し端部は丸く終る。文様は頸部に櫛描簾状文(直線文の可能性もある)を施文した後に、口縁部と胴部に波状文を施文する。口縁部波状文は3帯確認できるが、真中の一帯を最初に施文した後その上下に一帯ずつ施文している。胴部波状文は4帯まで認められ上から下の順序に施文している。内面は全体に軽い横ヘラミガキで整形される。(4)は口縁部付近の破片で復原口径は22.0cm・頸部径17.4cmである。口縁部は頸部より弓状に外反し、端部は粘土帯を一帯貼り付けることによって折り返し状口縁を呈する。内面の整形は斜方向のハケ整形後軽いヘラミガキがなされるが、ハケ整形痕を顕著にとどめている。文様は頸部に等間隔止め簾状文、口縁部と胴部に波状文が施文されるが、器面の摩耗が著しく施文順序等の詳細は不明である。折り返し部にも波状文が一帯施文されている。

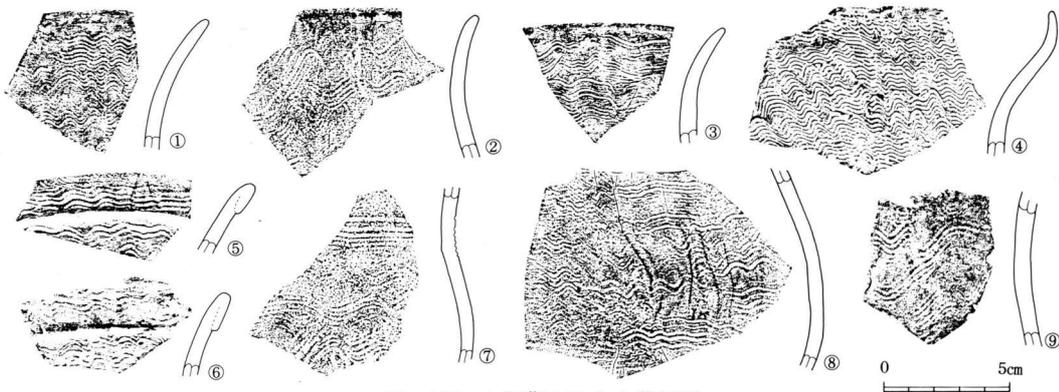
甗(5) 底部付近の破片で底径6.6cmである。底部中央に焼成前穿孔を一孔有する。整形は、外面



Ⅲ-98 1号溝址実測図



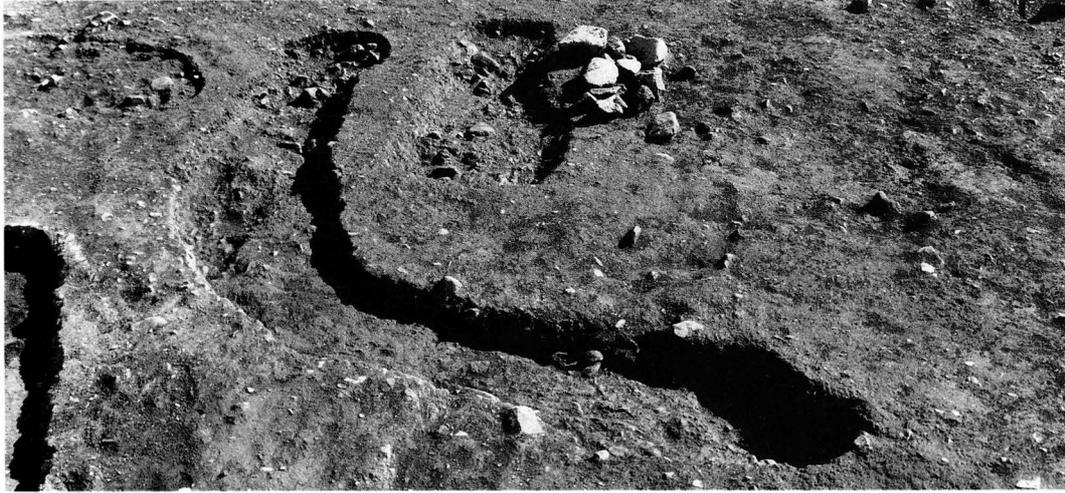
III-99 1号溝址出土土器実測図



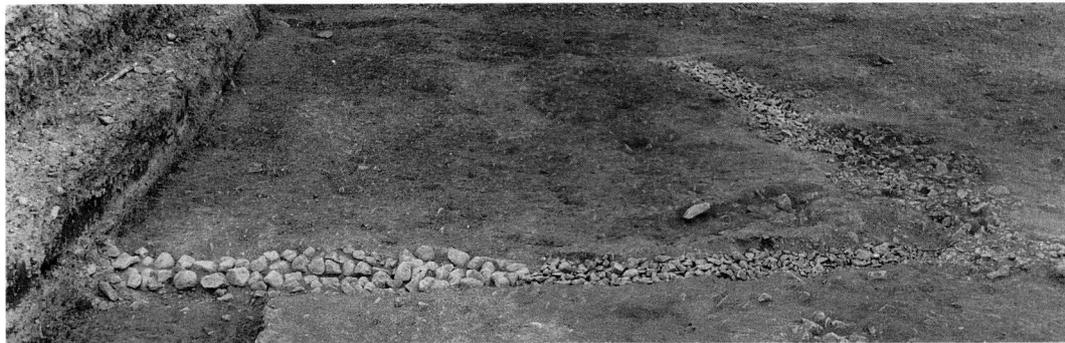
III-100 1号溝址出土土器拓影

は縦方向、内面は横方向のていねいなへらミガキがなされ、底部はへらケズリで仕上げる。

以上出土土器の様相からすれば本溝址は弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。



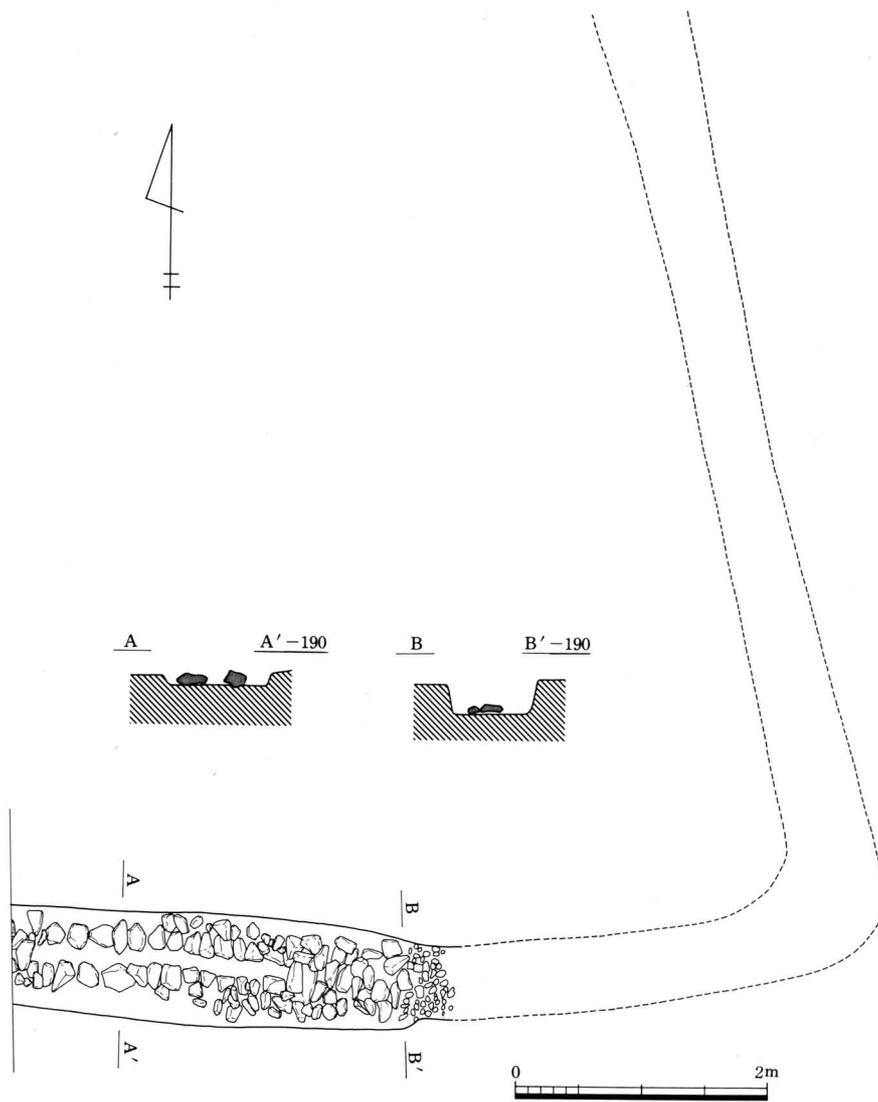
Ⅲ-101 1号溝址、3号土壇・集石遺構



Ⅲ-102 暗渠排水遺構



Ⅲ-103 暗渠排水遺構



III-104 暗渠排水遺構実測図

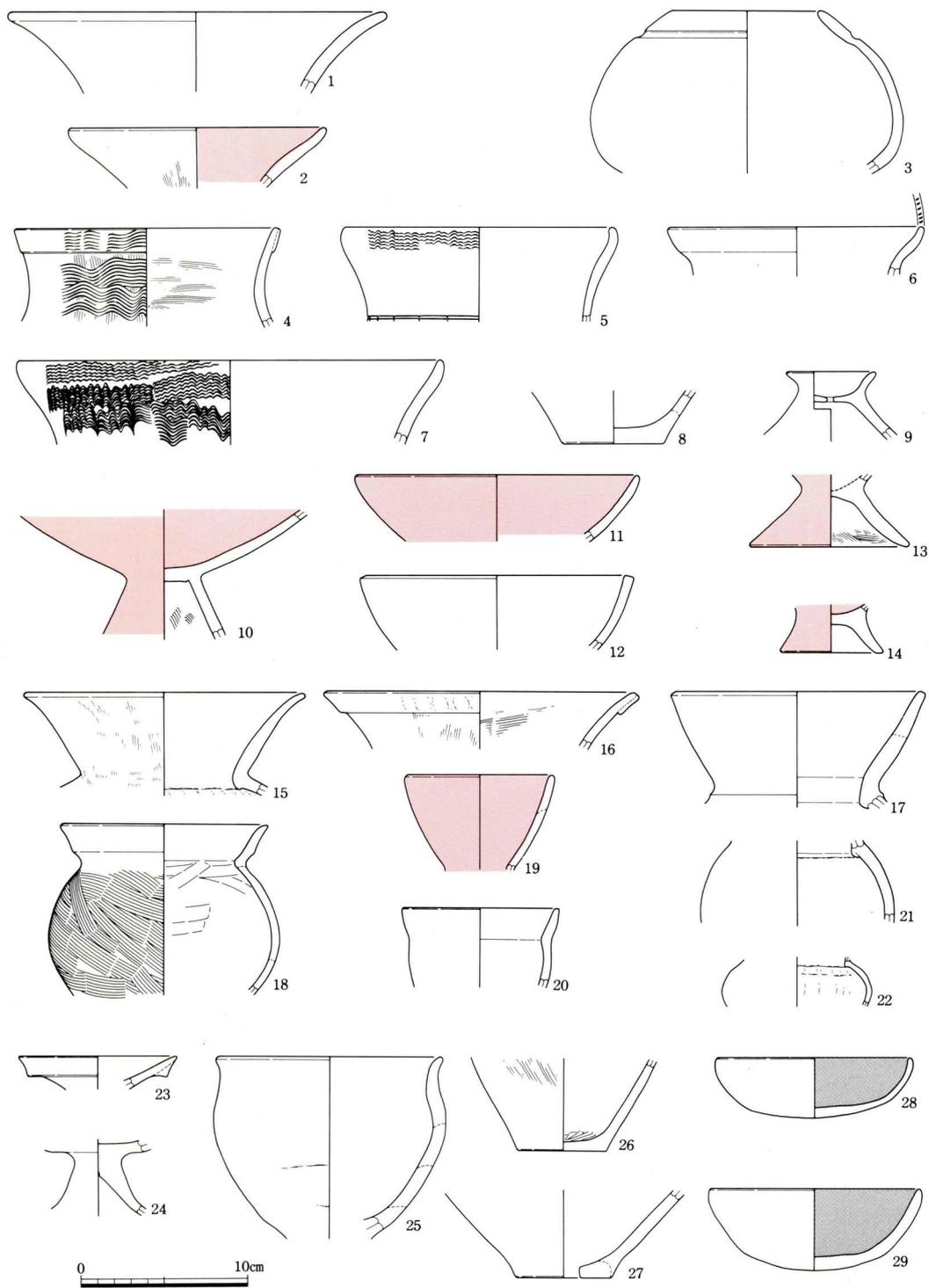
暗渠排水遺構

遺構 (III-102~104)

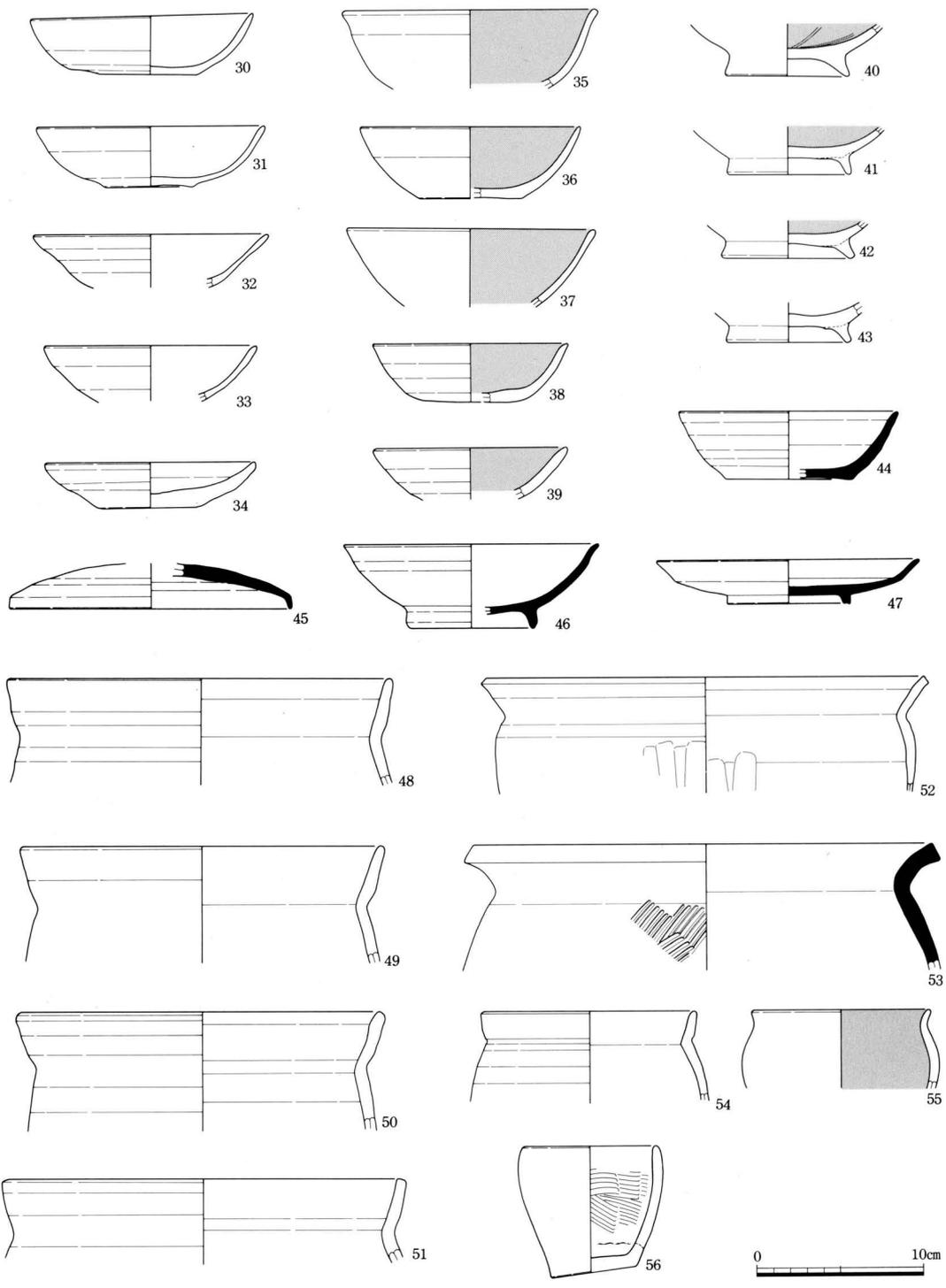
調査区北西にて検出されたもので、確認された範囲では東西6.50m・南北7.40mほどのL字形を呈している。南西端には人頭大の石を2列に配列した溝が3.3mほどの長さできれいに検出された。実測図中破線で示した部分には5~10cmほどの小石が敷かれたような状況を呈しているが、その下部からは配石等は検出されていない。

遺物

近世の陶器片が若干出土しているにすぎない。



III-105 遺構外出土土器実測図①



III-106 遺構外出土器実測図②

遺構外出土実測土器観察表(Ⅲ-105・106)

番号	種別	器種	口径 (cm)			遺存度	成 形・調 整・文 様
			口径	底径	器高		
1	弥生	壺	22.8	—	—	1/8	外面：横ナデ→縦篔磨き 内面：横ナデ→篔磨き 内外面とも赤彩されない
2	"	"	15.2	—	—	"	外面：ハケ→横ナデ 内面：横篔磨き・赤彩
3	"	無頭壺	8.8	—	—	1/3	外面：頸部→太篔描沈線→磨き、胴部→全体に横篔磨き 内面：全体に横篔磨き
4	"	甕	16.1	—	—	1/6	文様：複合口縁部に波状文→帯、口縁部上→下へ波状文施文 外面：ハケ整形後施文 内面：横ハケ→軽い磨き
5	"	"	15.6	—	—	"	文様：口縁部波状文→帯 頸部等間隔止め簾状文 外面：横ナデ→施文 内面：横篔磨き
6	"	"	15.4	—	—	"	文様：口唇部に篔による軽いキザミ 外面：強い横ナデ 内面：軽い横ヘラミガキ
7	"	"	25.4	—	—	1/4	文様：口縁部、波状文上→下の順序に施文 内面：横篔磨き
8	"	"	—	6.0	—	1/1	外面：縦篔磨き、内面：横篔磨き 底部：篔削り→ナデ
9	"	蓋	—	—	—	1/2	外面：全体にナデ 内面：横篔磨き
10	"	高坏	—	—	—	1/3	外面：篔磨き・赤彩 内面：坏部→篔磨き・赤彩 脚部→ハケ→ナデ
11	"	"	17.0	—	—	1/8	外面：篔磨き・赤彩 内面：篔磨き・赤彩
12	"	高坏 or 坏	15.6	—	—	1/8	外面：縦篔磨き 内面：横篔磨き
13	"	高坏	—	9.4	—	1/1	外面：篔磨き・赤彩 内面：坏部→磨耗 脚部→指頭による押圧斜ハケ→ナデ
14	"	"	—	6.2	—	"	外面：篔磨き・赤彩 内面：坏部→篔磨き・赤彩 脚部→ナデ
15	土師	壺	17.0	—	—	1/4	外面：斜or縦ハケ→横ナデ→軽い篔磨き 内面：ていねいな横篔磨き
16	"	"	18.4	—	—	1/8	外面：ハケ 口縁部：指頭による押圧調整→横ナデ 内面：横ハケ→横ナデ
17	"	"	14.6	—	—	"	外面：ハケ→横篔磨き？(磨耗) 内面：横篔磨き
18	"	甕	12.4	—	—	1/4	口縁部：胴部ハケ整形後内外面強い横ナデ 胴外面：斜ハケ(整形後基本的には上→下の順序になされる) 胴内面：斜めから横方向の篔削り→ナデ
19	"	罎	9.0	—	—	1/6	外面：横篔磨き・赤彩 内面：横篔磨き・赤彩
20	"	鉢	9.5	—	—	1/8	外面：口唇部面とり・全体に篔磨き 内面：軽い篔磨き
21	"	罎	—	—	—	1/6	外面：斜ハケ→軽い篔磨き 内面：ハケ→ナデ
22	"	"	—	—	—	1/3	外面：横ナデ 内面：口縁部→ナデもしくは軽い磨き 脚部→指頭による押圧調整後ナデ
23	"	器台	9.6	—	—	1/6	外面：口縁部→横ナデ→横篔磨き、体部→縦篔磨き 内面：軽い横篔磨き
24	"	高坏	—	—	—	1/1	坏部内面：篔磨き 脚外面：篔磨き、脚内面：横ナデ
25	"	甕	13.4	—	—	1/3	外面：口縁部→横ナデ、胴部→ナデ 内面：全体にナデ整形後篔磨き
26	"	"	—	5.4	—	"	外面：斜ハケ→縦篔磨き、内面：横or斜方向の篔磨き 底部：篔削り
27	"	甗	—	5.6	—	"	外面：ハケ→ナデ 内面：ハケ→篔磨き

番号	種別	器種	法 量 (cm)			遺存 度	成 形・調 整・文 様
			口径	底径	器高		
28	土師	坏	11.6	—	3.6	3/4	外面：篋削り→軽い横篋磨き 内面：横篋磨き→黒色処理
29	"	"	12.6	—	4.9	1/3	外面：全体に篋削り後口縁部付近にのみ横篋磨き 内面：横篋磨き→黒色処理
30	"	"	13.2	5.8	3.5	1/1	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き(黒色処理はなされていない) 底部：回転糸切り
31	"	"	13.6	5.2	3.7	3/4	内外面ロクロナデ 底部：回転糸切り
32	"	"	14.0	—	—	1/8	内外面ロクロナデ
33	"	"	12.6	—	—	1/4	内外面ロクロナデ
34	"	"	12.5	5.8	2.8	1/2	内外面ロクロナデ 底部：回転糸切り
35	"	"	15.2	—	—	1/3	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き→黒色処理
36	"	"	13.1	6.0	4.3	1/1	外面：ロクロナデ→口縁部付近のみ横篋磨き 内面：縦篋磨き→黒色処理 底部：回転糸切り
37	"	"	14.8	—	—	1/3	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き→黒色処理
38	"	"	11.7	5.2	3.5	"	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き→黒色処理 底部：回転糸切り
39	"	"	11.6			1/6	外面：ロクロナデ 内面：軽い篋磨き→黒色処理
40	"	高台坏		7.4		1/1	外面：ロクロナデ 内面：坏部→雑な放射状暗文→黒色処理 底部：回転糸切り→ロクロナデ
41	"	"		7.4		1/2	外面：ロクロナデ、内面坏部：放射状篋磨き→黒色処理 底部：回転糸切り
42	"	"		8.0		"	外面：ロクロナデ 内面 部：放射状篋磨き→黒色処理 底部：回転糸切り→横ナデ
43	須恵	"		7.5		2/3	内外面ロクロナデ 底部：回転糸切り→雑なナデ
44	"		13.2	7.6	4.1	1/6	内外面ロクロナデ、内外面ともに火だすきが認められる 底部：回転糸切り
45	灰釉	蓋	16.8			1/4	内外面ロクロナデ 外面天井部：回転篋削り
46	緑釉	台付碗	15.2	7.4	5.0	1/3	外面：口縁部→ロクロナデ 底部：回転糸切り→ナデ 内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り→ナデ
46	土師	台付皿	15.7	7.5	2.8	2/3	外面：下半→篋削り 口縁部→ロクロナデ、内面見込み部：不定方向の篋磨き 底部：切り離し後ロクロナデ→篋磨き、釉は内外面全面にかけられる
48	"	甕	22.9			1/6	内外面ロクロナデ
49	"	"	21.2			1/8	内外面ロクロナデ
50	"	"	21.0			1/8	内外面ロクロナデ
51	"	"	23.0			1/10	内外面ロクロナデ
52	須恵	"	26.2			"	外面：口縁部面とり、全体にロクロナデ後胴上半縦篋削り 内面：口縁部→ロクロナデ、胴部→ロクロナデ→縦方向の指ナデ
53	土師	"	27.8			1/8	外面：口縁部→ロクロナデ、胴部→ロクロナデ→平行タタキ 内面：ロクロナデ
54	"	"	12.4			1/6	内外面ロクロナデ
55	"	"	10.6			1/4	外面：ロクロナデ→横篋磨き 内面：横篋磨き→黒色処理
56	"	鉢	8.0	5.2	7.8	1/1	外面：口縁部→横ナデ、体部→篋削り→ナデ 内面：口縁部→横ナデ、体部→横ハケ、底部：静止糸切り

遺構外出土弥生時代土器拓影(Ⅲ-108・109)

Ⅲ-108・109には弥生土器の拓影を示した。①～⑱は中期栗林式土器の破片である。①～⑩は壺頸部破片で文様は縄文地文上に篋描の山形沈線を施文するものが多い。⑭～⑲は甕で⑭⑮は小型甕の口縁部破片、⑯～⑲は「コの字重ね」文様をもつ甕の体部破片であろう。

⑳～⑵①は後期前葉の吉田式土器の破片である。⑳～⑳①は壺頸部付近の破片で文様は篋描直線文を複数施文する⑳～㉑と鋸歯文を施文する㉒～㉓が認められる。㉔～㉕は甕口縁部破片で、単口縁の㉔㉕と端部が受け口状に立ち上がる㉖～㉗の2形態が認められる。文様は頸部に等間隔止め簾状文、口縁端部に一帯の波状文が施文されるが口頸部間は強い横ナデがなされるのみで無文のまま残される。㉘の口唇部にはLRの縄文が施文されている。㉙～㉚は甕胴部破片である。胴部文様は縦方向の櫛描羽状文が主体を占めるが㉛は羽状文の上端に波状文が施文されている。

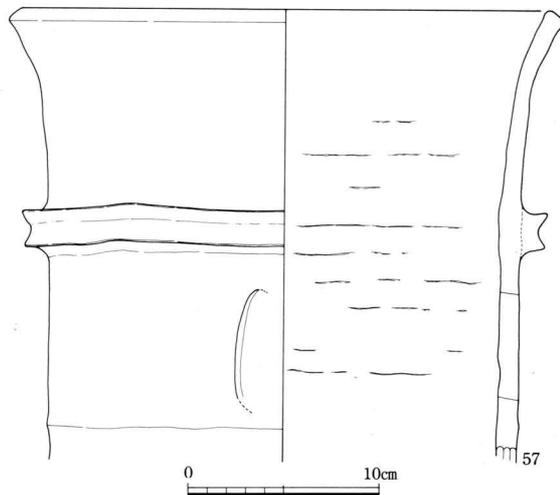
㉛～㉞は後期箱清水式土器の破片である。㉛～㉞は壺頸部破片で文様はT字文Cが中心である。㉜はT字文Cに簾状文が加わる点特異である。㉟～㉡は甕である。㉢㉣は粘土帯貼りつけによる複合口縁をなす。文様はいずれも波状文と簾状文により構成される。

遺構外出土埴輪(Ⅲ-107・110)

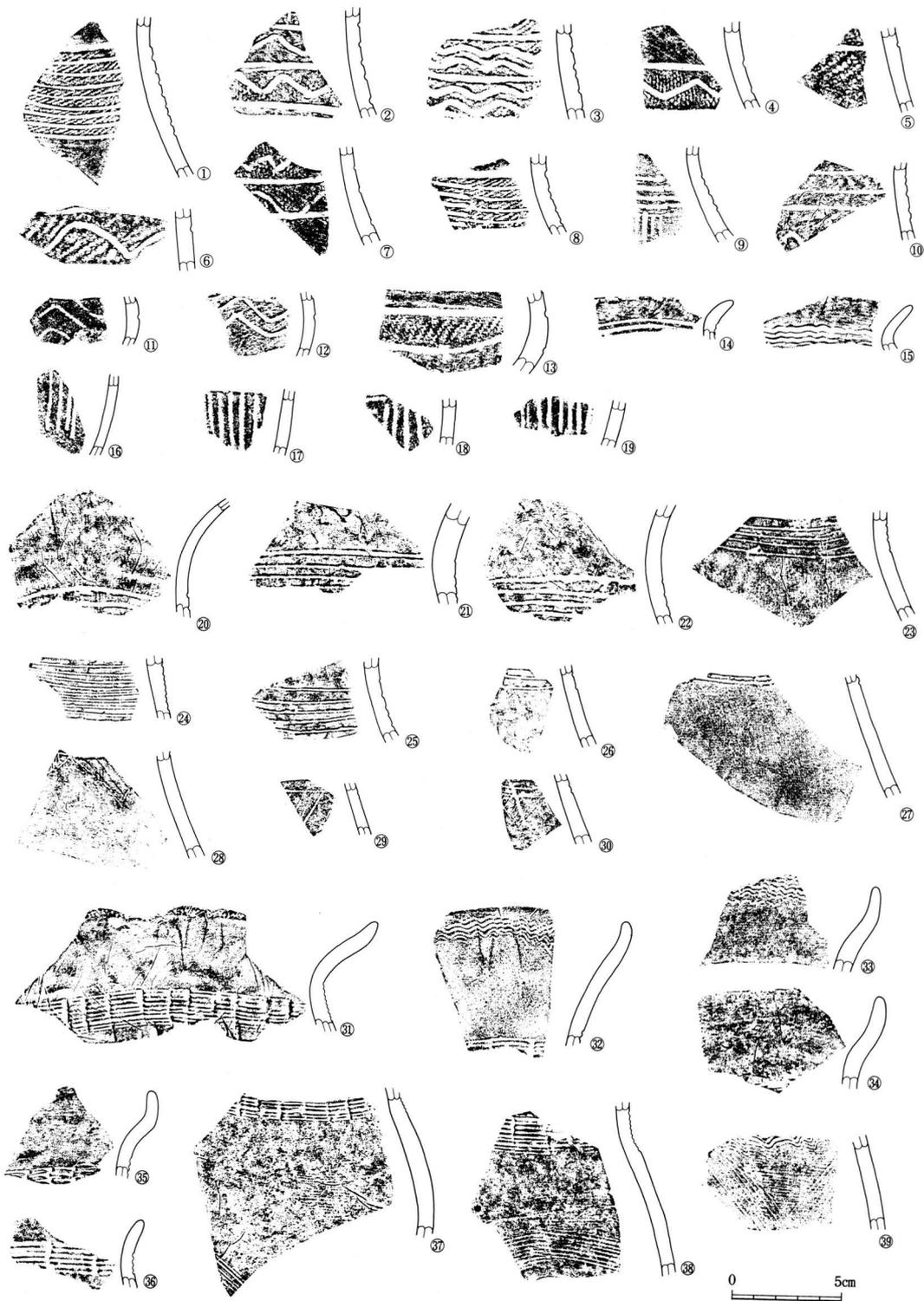
埴輪は12号・16号住居址の上層付近に集中して出土したものである。

Ⅲ-107は図上復原し得る唯一のもので口径29.2cmの円筒埴輪である。突帯は貼り付けによるもので剝離痕も含め2帯確認できる。また透かし孔も一孔存するが、残存部が少ないためその形状は不明である。外面の2次調整は全体に横ナデされる。また内面も横ナデされるが粘土の接合痕を比較的顕著に残す。外面には黒班が認められる。

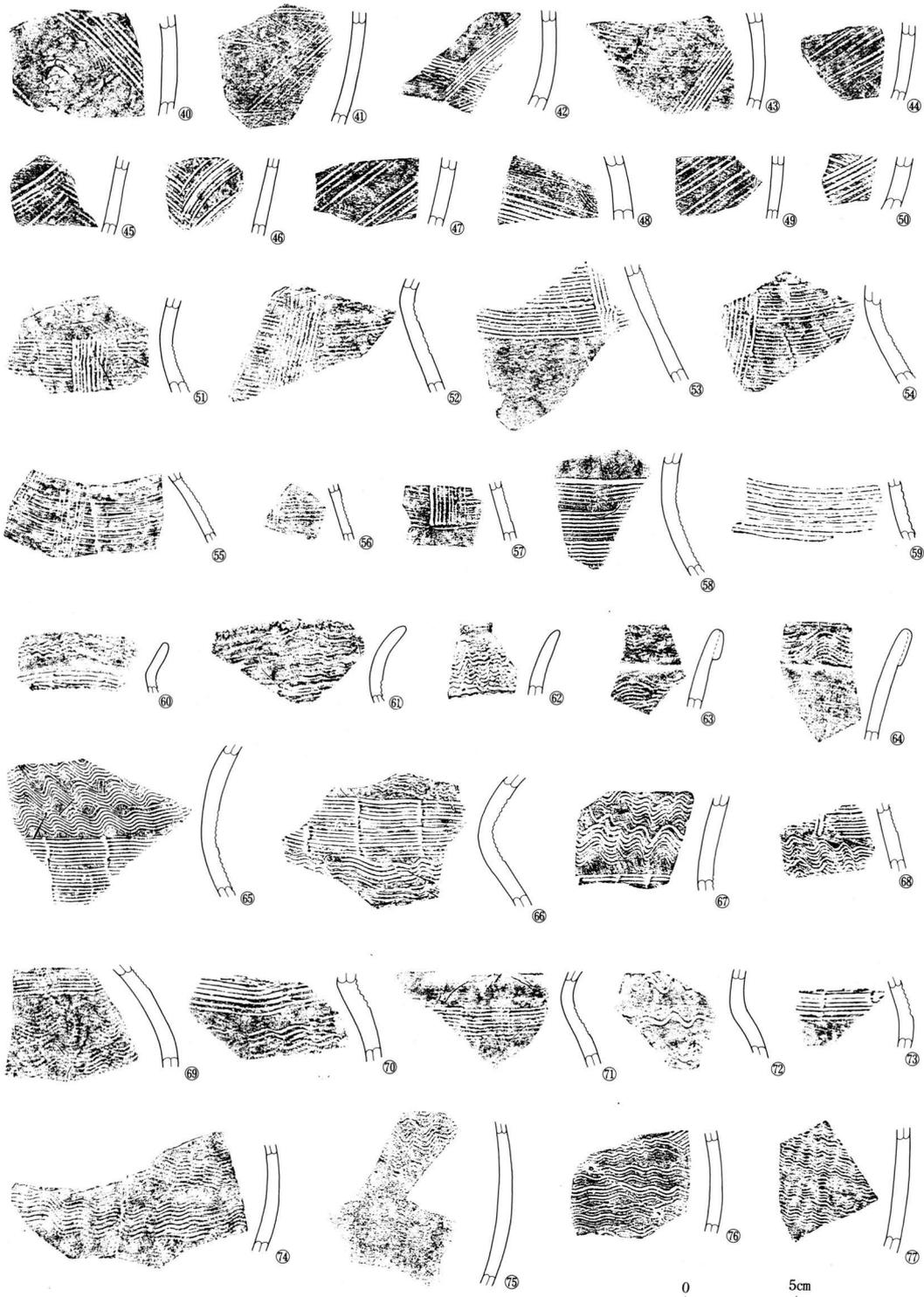
Ⅲ-110には拓影を示した。①～⑩は口縁部破片で、2次調整にナデが施される①②・タテハケが施される③～⑦ヨコハケがなされる⑧～⑩の3者が存在する。③の口縁部内面はヨコハケ後篋による山形沈線が描かれている。⑪～⑳①は体部破片である。⑪～⑬⑮には2次調整にタテハケが、⑰～㉑にはヨコハケが、㉒⑳①はヨコナデがなされている。⑭は突帯を境に上段にヨコハケ、下段にタテハケが認められる。⑬⑭⑰⑱⑳①には透し孔が存在するが、残存部の形よりすればその形状はいずれも円形透かしと考えられる。㉒～㉕は基部の破片で、タテハケがなされる㉒⑳①、ヨコハケがなされる㉖～㉘、ヨコナデがなされる㉙～㉚が存する。



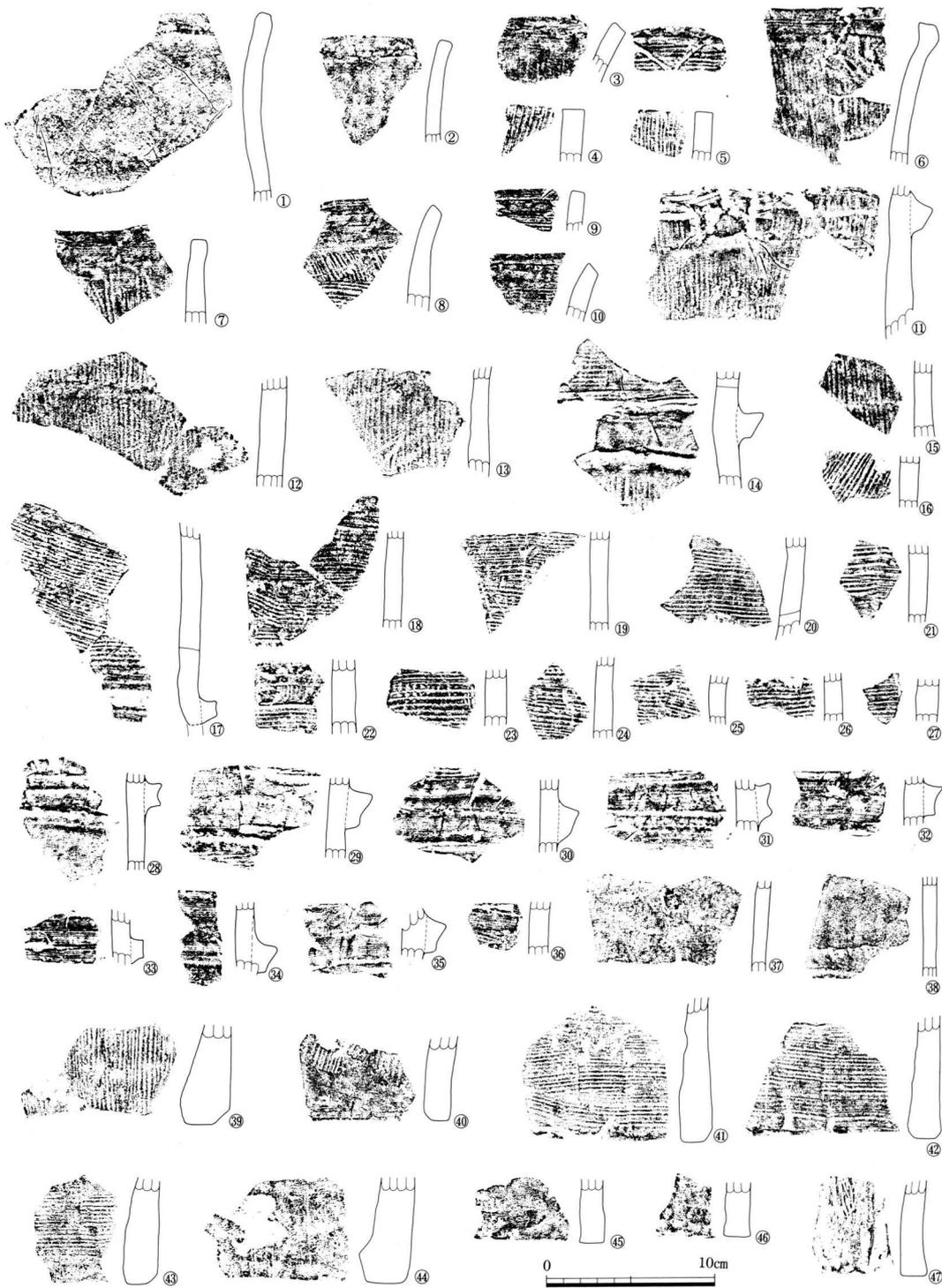
Ⅲ-107 遺構外出土埴輪実測図



III-108 遺構外出土土器拓影① (弥生土器)



III-109 遺構外出土土器拓影② (弥生土器)



III-110 遺構外出土器拓影③ (墳輪)

IV 結 語

本遺跡から前述のごとく弥生時代～平安時代にわたる多数の遺構・遺物が検出された。本遺跡は関谷川が開析した扇状地上に位置し、皆神山西麓遺跡群の様相の一端を明らかにし得たものと考えられる。以下各時代ごとの概要を略述し、現時点での総括としておきたい。

弥生時代 後期前半吉田式期の住居址2(2号・5号住)、後半箱清水式期の住居址5(3号・4号・19号・20号・25号)・土壙1(2号)・溝址1(1号)が検出された。主要構成器種の様相が把握し得る良好な一括資料は存在しないが、関谷川をはさんで東側に位置する屋地遺跡等との関連より、皆神山西麓における中核的な弥生後期集落の存在が予想される。

古墳時代 前期住居址1(23号)、中期住居址1(21号)、後期住居址6(8号・10号・11号・22号・24号・26号)が検出されている。10号・21号・24号住居址出土資料などは松代地区において今後良好な基準資料となろう。後期集落の大規模な展開の上で見落してならぬのは、周辺に存在する虫歌・宮崎古墳群等の後期古墳との関連であろう。生産域・集落域・墓域といった総合的な視点での追求が今後要求される課題であろう。また前・中期集落と舞鶴山1・2号墳との関係も同様である。遺構外出土ではあるが図Ⅲ-107に示した円筒埴輪は、2次調整等土口將軍塚古墳出土資料との類似性が認められ注目される。

平安時代 住居址4(1号・6号・7号・9号)、土壙1(3号)が検出されている。松代扇状地では初の緑釉陶器(Ⅲ-106、№47)の出土、ならびにⅡ章で指摘されたごとく「英多郷」の所在問題等、平安時代における複雑な動向の一端をかいまみている。

以上、真田十万石の町として知られる松代も、考古学的には未だ不明な地の一つであり残された課題も多い。すべて今後の調査研究に期するものである。



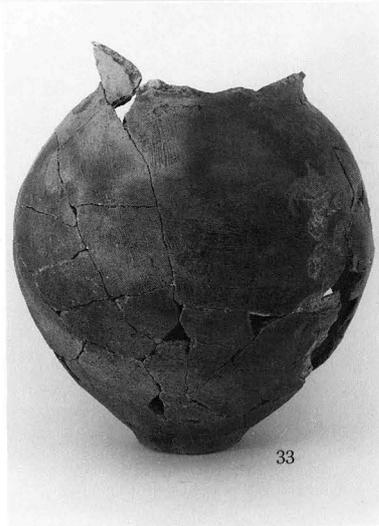
1号(1~5)・2号(6~8)・3号(9・10)・4号(11・12)住居址出土土器



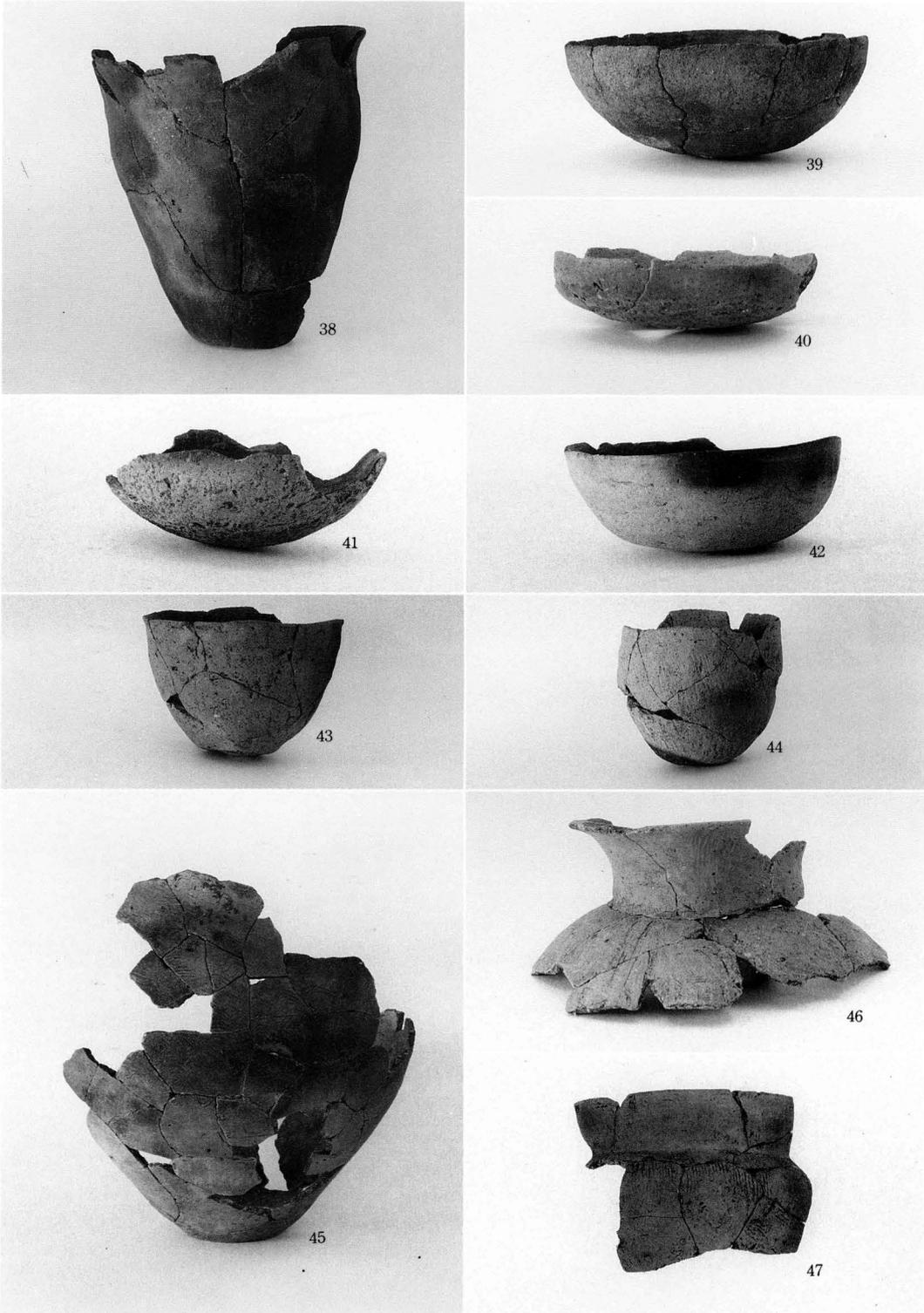
6号(13~18)・8号(19・20)・10号(21~23)住居址出土土器



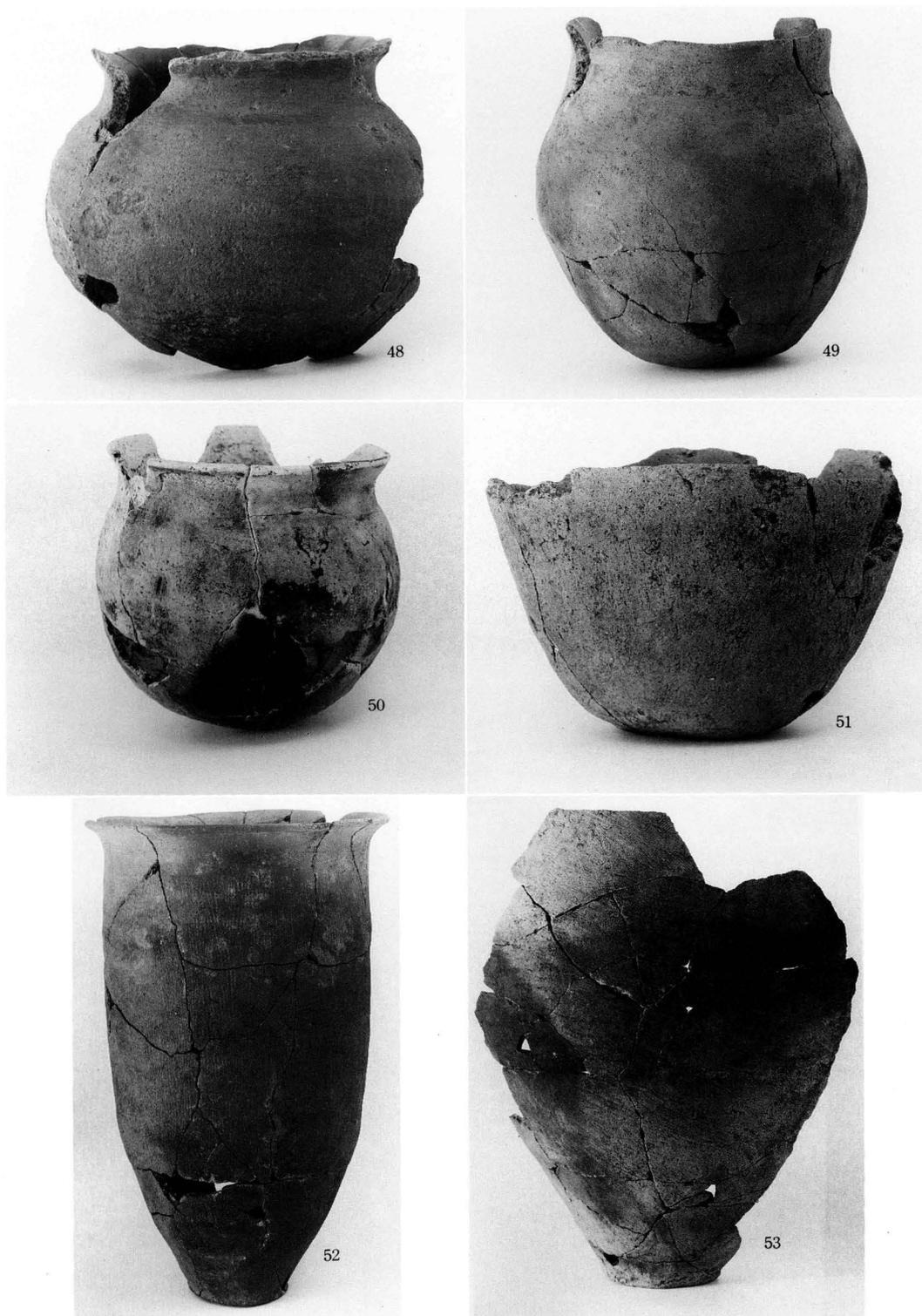
10号住居址出土土器



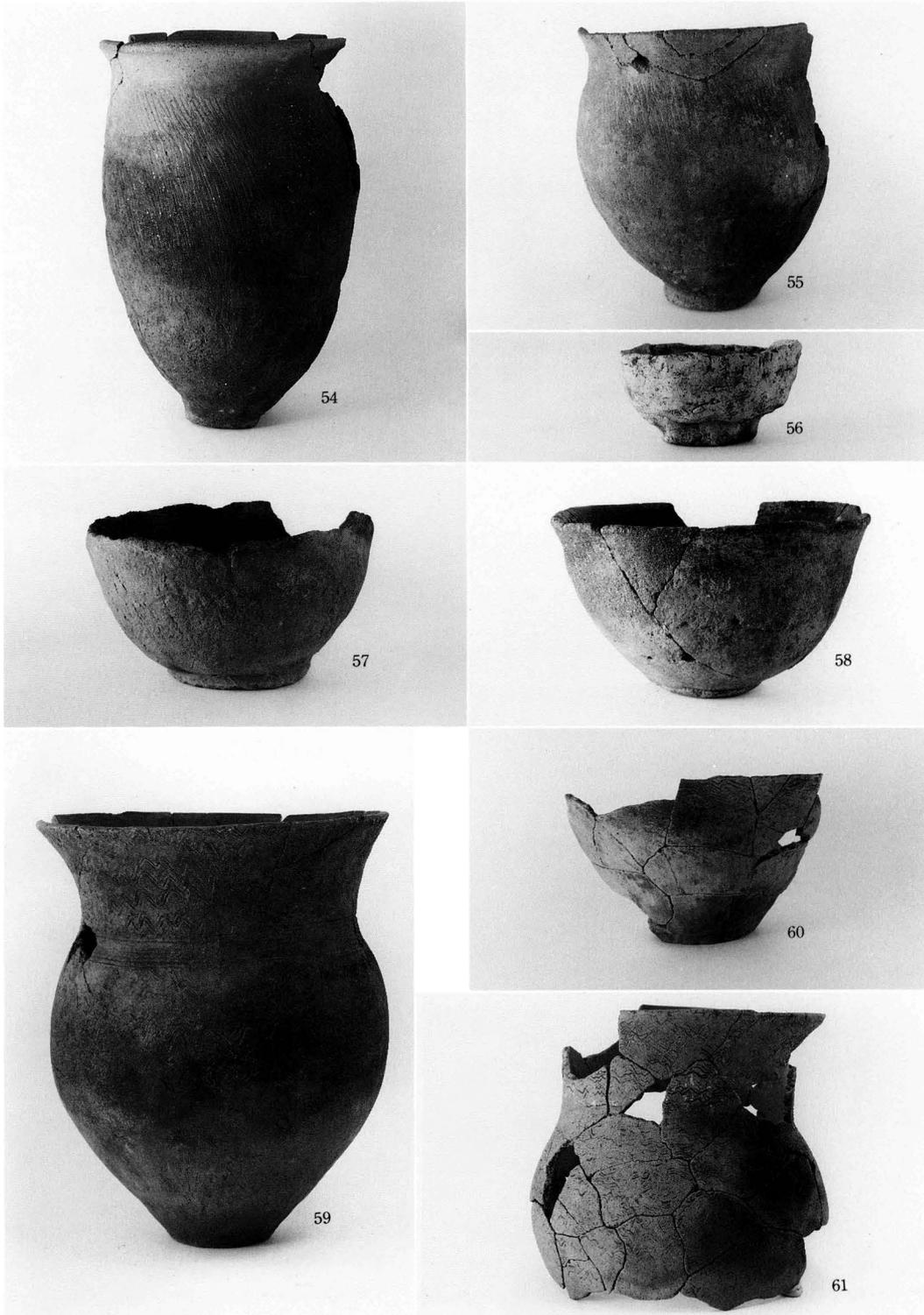
21号住居址出土土器



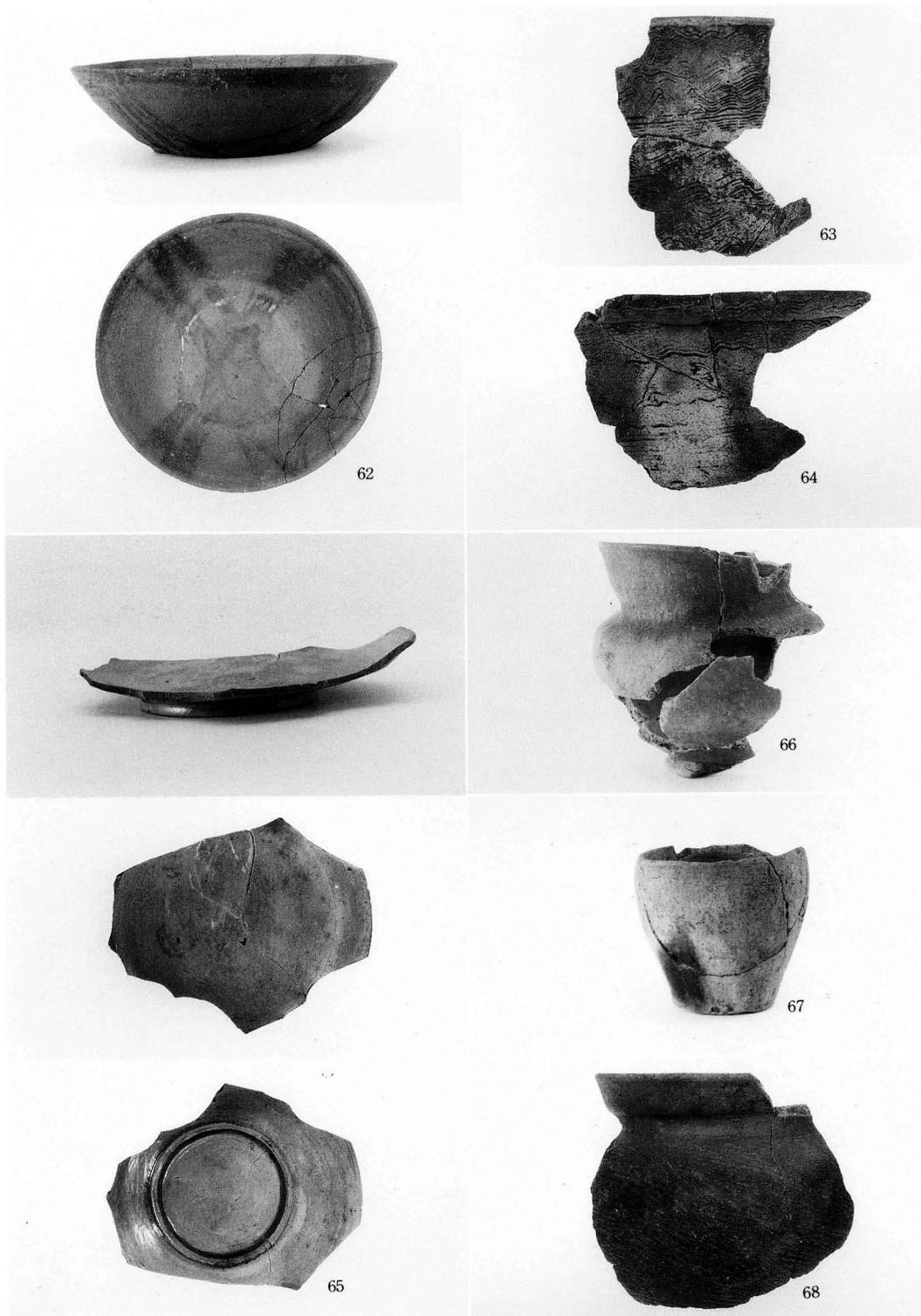
22号(38~44)・23号(45~47)住居址出土土器



24号(48~52)・25号(53) 住居址出土土器



26号(54~58)・20号(61)住居址、2号土壙(59・60)出土土器



11号住居址(66)・集石遺構(62)・1号溝址(63・64)・遺構外(65・67・68)出土土器・緑釉陶器(65)

- 長野市の埋蔵文化財 第1集 『信濃長原古墳群』
" 第2集 『浅川西条』
" 第3集 『中村遺跡』
" 第4集 『塩崎遺跡群』
" 第5集 『塩崎遺跡群(2)』
" 第6集 『三輪遺跡—付水内坐一元神社遺跡』
" 第7集 『田中沖遺跡』
" 第8集 『篠ノ井遺跡群』
" 第9集 『四ッ屋遺跡 (第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
" 第10集 『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
" 第11集 『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
" 第12集 『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA・E地点遺跡—』
" 第13集 『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
" 第14集 『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
" 第15集 『箱清水遺跡(2)』
" 第16集 『石川条里的遺構(3)・(村上駒沢遺跡)』
" 第17集 『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点遺跡—』
" 第18集 『塩崎遺跡群IV—市道松節小田井神社地点遺跡—』
" 第19集 『土口将軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』
" 第20集 『三輪遺跡(2)』
" 第21集 『芹田小学校遺跡』
" 第22集 『吉田高校グラウンド遺跡』
" 第23集 『横田遺跡群 富士宮遺跡』
" 第24集 『塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡』
" 第25集 『小島・柳原遺跡群 南川向遺跡』
" 第26集 『東番場遺跡』
" 第27集 『小柴見城跡』
" 第28集 『宮崎遺跡』
" 第29集 『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』
" 第30集 『地附山古墳群』
" 第31集 『町川田遺跡』

長野市の埋蔵文化財 第32集

ちゅう じょう
中 条 遺 跡

印刷 平成元年2月20日

発行 平成元年2月25日

編集・発行 長野市教育委員会

印刷 奥山印刷工業株式会社